

現代ピアニスト列伝

平成5年2月23日(火)～3月19日(金)

今回の常設展示では、ピアニストの自伝・伝記・研究をとりあげます。各種の伝記では研究者や作家はピアニストの肖像を描き出すために、それぞれの演奏者の個性に合った手法を用いようとしています。ホロヴィッツの伝記が約 650 人の関係者へのインタビューから構成されているのに対し、アラウの伝記は長時間に及ぶ一対一の対話から生まれています。最近では、演奏するグールドの激しい身ぶりを記号論的に分析する試みも見られるなど、その手法は多彩であり、自伝とともに、彼らの独自の存在感を十分に示しています。

読者はこうした書物から、単にピアニストの人となりを知るだけでなく、人間を語ることの面白さ、その方法の多様さを読み取ることが出来るでしょう。

展示リスト

1. ラフマニノフ 限りなき愛と情熱の生涯

ニコライ・D・バジャーノフ 著 小林 久枝 訳

東京 音楽之友社 1975 444p

<KD238-1>

作曲家としても知られるラフマニノフ(1873～1943)の伝記。ソ連で刊行されたシリーズ「非凡な人々の生涯」の中の一冊

2. マルグリット・ロン 魅惑的な生涯

ジャンヌ・ヴェーユ 著 荒井 義子 訳

東京 音楽之友社 1974 290p

<KD262-21>

フォーレやラヴェルのピアノ曲の初演を行ったロン(1874～1966)の評伝

3. アルフレッド・コルトー

ベルナール・ガヴォティ 著 遠山 一行・徳田 陽彦 訳

東京 白水社 1982 408p

<KD262-57>

フランスのピアニスト、コルトー(1877～1962)の生涯を、特に今世紀初めに焦点をあてて描き、その人間像を活写する

4. わが生涯と音楽

アルトゥール・シュナーベル 著 和田 旦 訳

東京 白水社 1974 357P

<KD262-25>

ベートーヴェンのピアノ・ソナタの演奏・校訂で知られるシュナーベル(1882～1951)の自伝。1945年、シカゴ大学における講演と質疑応答とをまとめたもの

5. ルービンシュタイン自伝 神に愛されたピアニスト

アルトゥール・ルービンシュタイン 著 木下 博江 訳

東京 共同通信社 1984 全2冊

<KD262-75>

「華麗なる旋律」に続く、ルービンシュタイン(1887～1982)の自伝第二巻

6. ピアノとともに

ヴァルター・ギーゼキング 著 杉浦 博 訳

東京 白水社 1968 264p

<763.2-cG45p-S>

モーツァルトやドビュッシーの演奏で名高いギーゼキング(1895～1956)の自伝とエッセイを収録

7. 鳴り響く星のもとに ヴィルヘルム・ケンプ青春回想録

ヴィルヘルム・ケンプ 著 土田 修代 訳

東京 白水社 1981 402P

<KD233-158>

ドイツのピアニスト、ケンプ(1895～1991)が語る幼年時代と青春期の思い出

8. アラウとの対話

ジョーゼフ・ホロヴィッツ 著 野水 瑞穂 訳

東京 みすず書房 1986 360P

<KD262-99>

チリに生まれ、ドイツに学び、幅広いレパートリーを持つピアニスト、クラウディオ・アラウ(1903～1991)が人生と音楽について語る

9. ホロヴィッツ

グレン・プラスキン 著 奥田 恵二・宏子 訳

東京 音楽之友社 1984 446p

<KD262-83>

膨大な資料とインタビューに基づいて構成されたホロヴィッツ(1904～1989)伝

10. 巨匠リヒテルの世界 昆田 亨 写真集
昆田 亨 著
東京 東京新聞出版局 1987 139p <YQ11-605>
18年間にわたってリヒテル(1915～)の姿を追った写真集
11. ベネデッティ・ミケランジェリ 人間・芸術家・教育者
リディア・コズベック 著 蛭原 万理 訳
東京 ムジカノーヴァ 1992 174p <KD262-E72>
伝説的な名声を博しているミケランジェリ(1920～)についての唯一の評伝
12. グレン・グールド 複数の肖像
ギレーヌ・ゲルタン 編 浅井 香織・宮澤 淳一 訳
東京 立風書房 1991 349p <KD262-E68>
カナダのピアニスト、グールド(1932～1982)をめぐる国際会議に提出された論文集。グールドをめぐる評伝・研究は、邦訳が出ているものだけでも十数種に及ぶ
13. アシュケナージ 自由への旅
ジャスパー・パロット 著 奥田 恵二・宏子 訳
東京 音楽之友社 1984 446p <KD262-100>
ソ連出身で後にロンドンへ移住、現在はアイスランド国籍を持つヴラディミール・アシュケナージ(1937～)が、東西対立の中での音楽家の生き方を振り返る